

不世出の経済学者、故エンカルナシオン教授の思い出

二村泰弘

フィリピン経済学界でいまだにその名を燦然と輝かせているのが故ホセ・エンカルナシオン (Jose (Pepe) Encarnacion) フィリピン大学名誉教授 (愛称はPepe) である。フィリピン大学経済学部長の要職を二〇年 (一九七四―一九九四年) にわたって務め、同学部のみならずフィリピンにおける経済学の発展に大いに貢献したことは広く知られている。

その人柄は温厚であるが学問に対する態度には「凜」としたものを感した。学部長に就任した当時はマルコス政権の絶頂期であったが、政治とは距離をおき、時の権力者に与(くみ)することもなかったと聞いている。その意味で、Pepeの一生は学問と共にあったといっても過言ではない。経済学部長を退官した後には上梓された記念論文集 *Choice, Growth and Development: Emerging and Enduring Issues* (一九九六年、フィリピン大学出版会) には、彼の経歴と研究業績が詳細に紹介されている。Pepeが世に問うた論文は、選好理論、数理経済、一般均衡モデル、開発経済、農業・農地改革そして経済史と幅広い分野に及んでいる。彼の関心領域が広く、また現実の問題に対しても鋭い分析を行っていたことがわかる。

昼間は学問の化身となるPepeも夕刻には現実の世界へ舞い戻ってくる。バックカスの忠実な僕(しもべ)となり、タバコをくわえ、スコッチ・ウイスキー片手に同僚と語り合う姿を学部内の談話室でしばしば見ることができた。

私がフィリピンに赴任し、フィリピン大学経済学部にも所属したのは一九九一年から二年間であった。Pepeに直接師事したことはないが、彼の記憶が鮮明に残っているエピソードがある。それはPepeがふと漏らした日本(人)との関わりに由来する。ある日、「トヨオ・ギョウテンはどうしている」という質問を受け、「デイン(学部長)、大蔵省(現財務省)だと思いますが、どうしてご存知なのですか」と聞き返すと、「俺のプリンストン大学の友人だ」と答えられた。大蔵財務官、東京銀行会長を歴任し、現在国際通貨研究所の理事長行天豊雄氏のことである。もう一つのエピソードは、とあるパーティーで、ほろ酔い気分のPepeが「おまえ、この歌を知っているか」といって口ずさんだのが「浜千鳥」のメロディーであった。びっくりして「デイン、なぜこの歌をご存じのですか」と聞くと、第二次世界大戦中、日本軍がフィリピンを占領していた当時、日本軍の将校

に習った、とのことであった(真偽のほどを確かめる術はないが)。戦後のフィリピンでは他のアジア諸国に比べて反日感情は極端に悪くなかったものの、フィリピンを代表する知識人から戦時中の日本人の話を聞くなどとは思ってもよらなかった。少年時代のPepeの目に映った日本(人)のイメージと戦後の経済発展を遂げた日本、その違いを彼はどう感じていたのであるうか、今となってはそれを知る由もない。

一九九四年に退官した後も大学で教育、研究に携わっていたが、それは同時に難病のパーキンソン病と戦う日々でもあった。Pepeは一九九八年七月、七〇歳で天界に召された。National Scientist (一九八七年に授与、日本では学士院会員に相当か?) であった彼は、マニラ首都圏マカティ市内にある英雄墓地 (Jingingan nga Bayani) で静かに眠っている。その墓所をアジ研元理事N氏、同僚Fさん、Pepeの息子のMark、アジ研事業のアシスタントをしていたJさん、そして私の五人が訪れたのは一九九九年四月中旬であった。灼熱の太陽が燦々と照りつけるなか墓碑に献花し、皆々Pepeの冥福を祈った。

(にむら やすひろ/アジア経済研究所
新領域研究センター)